「息子が生意気で、本当に腹が立つんです。とても平常心ではいられません。」というようなご相談を、お母さまから受けることがあります。子どもたちの様子を見ていると、「さもありなん。」と思われるふしもない訳ではありません。お母さま方が、毎日真剣にお子様たちと向き合ってくださっているがゆえのお悩みだと拝察いたします。

日本のペスタロッチと言われた東井義雄先生の『村を育てる学力』（明治図書）にこんな文章が載っています。

かつお　　六年　樫本　輝雄

けさ学校に来がけにちょっとしたことから、母といいあいをした。ぼくは、どうでもなれと思って、ぼろくそに母を言いまかしてやった。母がこまっていた。そしたら学校で昼になって、母の入れてくれた弁当のふたをあけたら、ぼくのすきなかつおがパラパラとふってあった。おいしそうにかおっていた。それをみたらけさのことが思い出されて、ぼくはこうかいした。母はいまごろ、さびしい心で昼ごはんをたべているだろうかと思うと、すまない心がぐいぐいこみあげてきた。

私はこの文章が大好きです。この話をすると、「今時、かつおぶしくらいで感激する子がいますか？」と、力説する方がいらっしゃいます。そこではないんですよ、そこでは！

確かに、昭和の十数年代の物の乏しい時代に書かれた文章のようですが、そこじゃない。樫本君は、きっと頭の回転の速いお子さんなのでしょう。母親をやっつけて、得意になって学校に来たのでしょう。そんな樫本君のために、彼の好きなかつおぶしを弁当の上に振りかけておいてやる母親の心。逆らっても背いても、自分の事を一途に考えてくれている母親の心に気がついて、ぐいぐいとすまない心が込み上げざるを得なかった。そこなんです！

子どもたちは、大いなる者に守られているということに気がついているのでしょうか。

本校の五年生の児童の日記です。

今日はふとおもいこんでみた。

なぜぼくは今生きているのだろう。ニュースで、

「小学生が車にひかれました。」

と、言っているのにぼくは、なんでそういうじこにあわないのだろう。それは、

「親、先生、学校、いろいろな人が守ってくれていたんだ。」

と、思い、お母さんにかんしゃのきもちを伝えたいけどきんちょうする。

まずいすにむかって、

「いつもありがとう。これからもよろしくね。」

と、言いました。

そして本番。

「…ありがと。」

きんちょうして「ありがと」しか言えなかったけど、きもちが伝わってくれればいいです。

心の中では思っているのに、それを素直に表現できない男の子がたくさんいるようです。

お腹を痛めて生んで、慈しみながら育てているのに、生意気な口をたたかれて…。平常心（へいじょうしん＝普段通りの平静な心）でいられる訳はありません。

禅の言葉に「平常心是道」という言葉があります。「びょうじょうしん　これどう」と読むようです。この「平常心（びょうじょうしん）是道」とは、「平常心（へいじょうしん）」を保とうと、ジタバタせずに「あるがまま」を肯定することが「道」につながるという深〜い意味を持つ言葉のようです。

お子さんに生意気なことを言われて思わずカッとしそうになった時、「平常心是道＝びょうじょうしん　これどう」と心の中で五回唱えるといいのかもしれません。カッとなる自分も当たり前と受け入れて、少し間をおいて、お子さんの寝顔を直接ご覧になるか、携帯電話の待ち受け画面にしておいて、それを眺めるようにすると、きっと平常心（へいじょうしん）を取り戻せること請け合いです。

（立教小学校校長　田代　正行）